

關羽と貂蟬

はじめに

關羽と貂蟬、といへば、共に小説『三國志演義』の重要な登場人物である。關羽は後に蜀の主となつた劉備の義弟として武勇拔群の活躍を見せる忠義の武將であり、貂蟬は登場場面こそ少ないものの後漢末の獨裁者・董卓を倒すための「連環の計」を成功に導いた美女である。ただし、作中この二人は別々の場面で登場するため、二人の間には何の關係も生しない。

しかし、一方で、『三國志演義』成立以前から關羽と貂蟬をめぐる物語が存在したことも知られている。それは最初、「關羽か貂蟬を斬る物語」であつた。『三國志演義』に採用されなかつたこの物語は、戯曲・語り物・民間傳説の形でその内容を後世に傳えている。また、『三國志演義』の登場以後、これらとは違つた展開を見せる關羽と貂蟬の物語も生まれた。この新しい物語も戯曲・語り物・民間傳説の形をとる。

本稿は、こういった關羽と貂蟬をめぐる物語を概観し、物語の變遷とその背景について論じるものである。最初に『三國志演義』におい

て二人かどのように描かれていたかを確認し、續いて「關羽が貂蟬を斬る物語」、變容した關羽と貂蟬をめぐる物語の順に紹介して、最後にこれらの物語の背景について考察を加える。

一、『三國志演義』における關羽と貂蟬

ここでは『三國志演義』で描かれる關羽と貂蟬の特色について確認する。後で關羽と貂蟬をめぐる物語を見ていく際に比較しやすいよう、まず一般的に定着している『三國志演義』の關羽像・貂蟬像をおさえておきたい。

- 『三國志演義』で描かれる關羽の特色としては、次の五點を挙げることにできる(併せてその特色が表れる代表的な場面と卷數を示す)。
- ①義兄である劉備に對して忠を盡くす——千里獨行(卷二)
 - ②義を重んじる——義釋曹操(卷十)
 - ③拔群の武勇——温酒斬華雄(卷一)、刺顏良(卷五)、誅文醜(卷六)、單刀赴會(卷十四)、威震華夏(卷十五)
 - ④他人に對して傲慢——大意失荊州(卷十五・十六)
 - ⑤女色を好まない——曹操の陣營にいた時、曹操が寄こした美女に目

もくれない(巻五)

一方、貂蟬は史書には見られない架空の女性である。^②『三國志演義』の中で、貂蟬は大臣・王允の養女という設定になっており、自分を養ってくれた王允に恩返しするため、國家を獨裁者・董卓から守るため、自らを犠牲にして體を獻じ、董卓の養子・呂布に董卓を殺させる(いわゆる「連環の計」、巻二)。ここの貂蟬は美貌の持ち主であると同時に、勇敢で機知に富む女性として描かれる。その後、貂蟬は呂布の妾となり、呂布が曹操に討伐された後、曹操によって都に送られた(巻一・四)。

關羽と貂蟬はいずれも品行方正で義を重んじ、胸に大志を抱いた高潔な人物として描かれている點が共通する。しかし、先述の如く、『三國志演義』ではこの兩者が絡む場面は一切なく、二人の間には何の關わりも生しない。

ちなみに、『三國志』の一部始終を扱ったものとしては、『三國志演義』の前段階にあたる『三國志平話』(元至治年間)〔三三二〕～〔三三三〕(刊)でも、やはり關羽と貂蟬の間には何の關係も生しない。ただし、貂蟬の設定が『三國志演義』と異なる點は注意に値する。『三國志平話』では、貂蟬はもとも呂布の妻なのである。別れ別れになっていった夫と再び結ばれたいがため、王允に協力するのである。

二、「關羽が貂蟬を斬る物語」

本節では、關羽と貂蟬をめぐる物語のうち、まず「關羽が貂蟬を斬る物語」について見ていく。

「關羽が貂蟬を斬る物語」のうち、最も古いと思われるのは元明間の雜劇「關大王月下斬貂蟬」である。明・晁瑛「寶文堂書目」(巻中

「樂府」、清・錢曾「也是園書目」(第十卷「古今雜劇」、清・姚燮「今樂考證」(第二本「著錄二」、たなし「月下」を「月夜」に作る)にその題名が著録されている。また、明末の祁彪佳の「遠山堂劇品」(「具品」)では「斬貂蟬」という題名で著録されており、注に「北五折」(五幕構成の雜劇)とある。しかし、作品そのものは残念ながら傳わっていない。

「關羽が貂蟬を斬る物語」の全貌が分かる現存最古の作品は、明代の戲曲選集「風月錦囊」^①所収の「三國志大全」^②という作品で、この中に關羽が貂蟬を斬る場面がある。「三國志大全」に見られる「關羽が貂蟬を斬る物語」は、内容が完全であると同時に、それ以降の「關羽が貂蟬を斬る物語」とも基本的な内容が共通するので、ここでその具體的内容を紹介する。場面は呂布が滅ぼされた直後である。

- ①關羽が呂布を捕らえた張飛を贊嘆する。
- ②その様子を見ていた貂蟬は關羽にまみえ、その歡心を買うことに努める。保身のためにおへっかを使って關羽に氣に入られようとする。
- ③關羽は月夜に「春秋」を讀みながら、呂布も美女(貂蟬)のために身を亡ぼしたことに思いを致す。
- ④貂蟬は手のひらを返したように夫・呂布の悪口を言い、關羽・張飛をほめる。
- ⑤關羽は貂蟬が呂布を誤らせたことと、夫を裏切るその不貞ふりとを責める。

⑥關羽はこのような不義者の貂蟬を生かしておいては禍の元になると考え、これを斬り殺す。

以上か「三國志大全」に見える「關羽が貂蟬を斬る物語」である。その後の戲曲や彈詞・民間傳説に見られる「關羽が貂蟬を斬る物語」

も基本的にはこの筋立てか土臺になつてゐるといつていい。

明萬曆年間（一五七三—一六二〇）の戲曲選集『群音類選』卷十二に收められた傳奇「桃園記」の中にも「關斬貂蟬」と題された一段がある。内容は先の「三國志大全」の③④⑤に相當する。この中で關羽は、貂蟬に英雄の名を挙げさせたところ、劉備・關羽・張飛をおだてて夫・呂布を貶める態度に出たため、怒つて貂蟬を斬る。

清代の戲曲選集『綴白裘』十一集「同集」には「斬貂」という花部亂彈の塞本が收められてゐる。内容はやはり「三國志大全」の③④⑤に相當する。作中、貂蟬は張飛に捕らえられ、關羽の許に送られたと説明される。關羽が貂蟬に虎牢關の戦いにおける英雄は誰かと問うと、貂蟬は張飛こそ英雄だと答え、やはり夫・呂布を貶める。たし、これまでの作品と異なり、本當は呂布こそか英雄だと思つてゐるといふ貂蟬の胸の内も語られる。

京劇にも「斬貂蟬」といふ演目がある。内容は『綴白裘』所收の「斬貂」と同じ。

以上か戲曲に見える「關羽が貂蟬を斬る物語」であるか、次は語り物である。彈詞『三國志玉璽傳』卷六に關羽が貂蟬を斬る場面がある。この作品では關羽自身か貂蟬を捕虜にする。やはり關羽か、誰こそが豪傑かと問うと、貂蟬は夫・呂布を立てず、劉備・關羽・張飛をひたすら稱える。關羽はこれを不義として貂蟬を斬る。貂蟬が出家を希望するといった戲曲と異なる點も見られる。

民間傳説にも「關羽が貂蟬を斬る物語」がある。湖北省襄陽市には「關羽月下斬貂蟬」といふ話が傳つてゐる。これは内容がこれまでものと少し異なり、貂蟬がおへっかを使うことはない。呂布を討伐した後、劉備と張飛が貂蟬を欲しかつてゐるのを見た關羽は、後の禍

を避けるために貂蟬を斬る決意をする。しかし、いざ斬ろうとする時、心のためらいか生じ、思はず刀を貂蟬の影の上に取り落としたところ、貂蟬本人の首か落ちるといふ話である。

以上、「關羽が貂蟬を斬る物語」について概観した。ここで「關羽が貂蟬を斬る物語」における關羽と貂蟬の特徴をまとめておこう。これらの物語での關羽は、禍根を断つために丸腰のか弱い女子を斬る。女色に惑わされることなく、「義」（義理、正義）を守ることを全うした關羽は、あくまでも英雄として描かれてゐる。この關羽の英雄ぶりこそ、これら「關羽が貂蟬を斬る物語」の主題となつてゐるといえる。

一方、貂蟬は不義で貞節のない、美貌で男を惑わす悪女として描かれる。特に注意すべきは、『三國志演義』以外の文學作品では、貂蟬はもともと呂布の妻という設定になつてゐることか多いという點である。これは前節で觸れた『三國志平話』でもそうであつた。また、元雜劇「錦雲堂美女連環記」でも貂蟬は呂布の妻という設定になつてゐる。本節で取り上げた「關羽が貂蟬を斬る物語」においても、『風月錦囊』所收「三國志大全」、および「群音類選」所收「桃園記」は明らかにそうなつてゐる。當時、貂蟬はもともと呂布の妻であるという設定は一般に普及してゐたのだらう。したかつて、これらの物語では、餘計に貂蟬の不貞ふりか際立つのである。

續いて「關羽が貂蟬を斬る物語」の内容に注目すると、民間傳説「關羽月下斬貂蟬」以外は、『風月錦囊』所收「三國志大全」以來、基本的な枠組みは變つてゐない。さらに、『群音類選』所收「桃園記」では關羽が貂蟬に英雄の名を挙げさせるか、このように關羽が貂蟬を試す件は「綴白裘」所收「斬貂」・京劇「斬貂蟬」・「三國志玉璽傳」

にも見られ、後述の變容した關羽と貂蟬の物語にも受け継がれる。貂蟬を試す件は、關羽と貂蟬をめぐる物語の中の一場面として定着していったようである。また、民間傳説かそれ以前のものとして成立してゐるのは、この傳説か比較的新しいもので、『三國志演義』成立以後に普及・定着した人物像の影響を受けているためである。

三、關羽と貂蟬をめぐる物語の變容

その後、「關羽か貂蟬を斬る物語」を下敷きとしつつも、それとは異なった話の展開を見せる關羽と貂蟬の物語が登場した。本節ではこれら變容した關羽と貂蟬をめぐる物語について見ていく。

まずは明の雜劇「女豪傑」である。この作品は、明・祁彪佳「遼山堂劇品」(「能品」)や、清・沈復傑「鳴野山房書目」(卷三「雜劇」)の「名劇集」(共七十二本)にその題名が記録されているか、作品そのものは傳わっていない。作者は諸葛味水。「遼山堂劇品」はこの作品について次のように評す。

諸葛君は俗に眞じられて「斬貂蟬」かほとんとてたらめなので、この女(貂蟬)か修行して仙人となる話を作ったか、葉中郎の妻・牛太師の娘と會うというのは、南戲「琵琶記」になぞらえずぎであり、まさにいわゆるてたらめな話(「斬貂蟬」)をまっとうにしたというものである。

ここから分かるのは、「斬貂蟬」、すなわち「關羽か貂蟬を斬る物語」がてたらめであるということに對する反發から、「女豪傑」という作品が生まれたという點である。それでは作中、關羽か貂蟬とどう關わ

るのか、そもそも關羽と貂蟬に關わりか生しるのか否か、という點か氣になるか、作品か傳わらないためそれらを知ることはできない。

清代の車王府鈔藏曲本には語り物の一種である子弟書も含まれるか、その中に「關羽か貂蟬を斬る物語」を下敷きにしつつも、それとは異なる展開を見せる關羽と貂蟬の物語がある。「十問十答」と題された作品かそれである。場面は、關羽か一時的に曹操に身を寄せていた時ということになっている。

話の内容は以下の通り。曹操は關羽を自分の陣營に引き留めるため、美女・貂蟬を關羽の許へ送り込む。關羽の方ではその意圖を見抜いており、また、かつて董卓・呂布の妻となりながら、今は曹操に身を寄せる貂蟬を不義とみなす。將來に禍根を残さぬよう、關羽は貂蟬を質問攻めにして、答えられなかったらそれを理由に斬ろうとする。貂蟬は立てつけに出された質問に繰みなく答えるか、當今の英雄は誰かと問われた時に、心中では呂布こそ英雄と思いつつも、關羽こそ英雄と答える。おへっかを嫌う關羽はこれを不義・不貞とみなし斬ろうとする。貂蟬は、自分か恥を忍んで生き續けているのは、いずれ曹操を殺すためであったと釋明し、それを打ち明けた以上は曹操の許へ戻れぬと出家することを希望する。關羽も貂蟬のことを見直し、出家する許可を與えたところ、西王母か現れ、もと仙女だった貂蟬を伴って歸る。

この作品では、關羽か次から次へと質問し、貂蟬か流れるように答える場面か大半を占める。その内容は歴史・藝術・天文・地理・宗教など多方面にわたる。「關羽か貂蟬を斬る物語」においてその構成要素となった關羽か貂蟬を試す件を、作者は自らの知識と文才を示すために利用しているといえよう。

また、民間傳説に「月夜送貂蟬」というのかある。こちらは曹操や劉備が呂布を討ち破った後の話となっている。内容は次の通り。曹操は劉備・關羽・張飛を仲違いさせるために、美女・貂蟬を關羽に與えようとする。まず貂蟬を處刑するといつわり、關羽が助命を乞うたら、貂蟬を關羽に嫁かせるという手筈である。一方、囚われの身となった貂蟬は謀叛人の妻である自分の行く末を悲観して、夜も泣き續ける。これを聞いた關羽は、「すでに二人に嫁いた不埒者のお前か何を立く」と貂蟬をなじる。貂蟬は國家の危機を救いながら、かえって罪人とされる不公平を訴える。關羽は貂蟬のこゝろを見直し、これに同情していたおりしも、曹操から貂蟬を引つ立ててくるようにとの命令が届く。貂蟬が殺されると見た關羽は、貂蟬を逃かそうとする。關羽の優しさに惹かれた貂蟬は關羽の側にいたいと言うか、これに關羽は怒り、貂蟬を斬ろうとする。貂蟬が出家したいと言いつ直したので、關羽は貂蟬を寺まで送って出家させる。劉備も曹操も、關羽は女色に感わされな

い眞の英雄たと稱える。

新編川劇(新作の川劇)「貂蟬之死」は、關羽と貂蟬が互いに惹かれあうという話になっている。作者は陸學義。「水滸下邳」「貂蟬修書」「關羽養蟬」「群雄奮鬪」「殘月芳魂」の五場から成る。曹操は劉備と共に呂布を水攻めにする。貂蟬は城内の人民を救ってくれるよう、關羽に手紙を書いて頼む。關羽はもともと貂蟬を美貌だけで徳のない人間と思っていたか、意外にも國を憂い民を憂えていると知り、惹かれていく。呂布を殺した後、曹操は關羽を籠絡するために貂蟬を與える。成婚の夜、二人は幸せだか、關羽が曹操に使われることを恐れた劉備は、贈り物にかこつけて關羽に桃園結義以來の志を思い出させる。初志を思い出した關羽は、貂蟬を追い出そうとする。關羽の突然の心變

わりに、貂蟬は自刎して果てる。

これらの物語における關羽と貂蟬の特徴をまとめると、次のことか見える。まず關羽は、その人物像は「關羽が貂蟬を斬る物語」におけるそれと基本的に變わらない。相變わらず女色に感わされず「義」「義理、正義」を重んずるという性格で描かれている。しかし、これらの物語では、關羽は貂蟬を斬ることはなく、むしろ彼女に同情したり好意を示したりする。こういった「關羽が貂蟬を斬る物語」とは異なる關羽の行動は、貂蟬の人物像の變化を受けてのものである。關羽の人物像そのものは、物語の筋立てが變わろうとも、決して變わっていない。

では、その貂蟬の人物像はどうなっているだろうか。これらの物語で貂蟬は美貌ばかりでなく、才徳兼備、博識で義に厚く、國を憂い民を憂える愛國婦人として描かれている。これは先に見た「三國志演義」における貂蟬像と一致し、彼女はもはや最初から呂布の妻というわけでもなければ、不義不貞の惡女でもない。

物語の内容に着目すると、それぞれが独自の筋を持つとはいえず、次の一點は共通する。「關羽が貂蟬を斬る物語」か關羽の英雄ふりを描くことに力点を置いていたのに對し、變容した關羽と貂蟬をめぐる物語では、關羽の英雄ふりを描きながら、貂蟬の智徳に優れたさまざま力を込めて描寫している點である。貂蟬像が大きく轉換したことで、關羽中心の物語から、關羽と貂蟬の二人を肯定的に描く物語へと變容したのである。

四、關羽と貂蟬をめぐる物語の背景

以上、關羽と貂蟬をめぐる物語について、「關羽が貂蟬を斬る物語」

と、その後の變容した物語とをそれぞれ見てきた。本節ではこれらの物語の背景について、いくつかの観點から考察していきたい。

(一) 「關羽が貂蟬を斬る物語」はなぜ生まれたか

そもそも關羽か貂蟬を斬るという物語はとうして生まれたのたろうか。貂蟬か架空の人物である以上、この話が史實でないことは明白である。しかし、史書の中に女性にまつわる關羽の逸話がないわけではない。陳壽『三國志』關羽傳の裴松之注に引く『蜀記』には、次のような話が見える。

曹公(曹操)が劉備と共に呂布を下邳に包圍した時、關羽が曹公に、「呂布は秦宜祿に救援を求めに行かせましたか、私はその妻(秦宜祿の妻)を所望したい」と言上したところ、曹公はこれを許した。呂布を討ち破った時に、關羽はまた何度も同じことを曹公に言上した。曹公はその女が美人なのではなからうかと疑い、先に連れて來させて顔を見ると、自分のもとに留めた。關羽は心中穏やかでなかつた。

この逸話から次の二つのことか見える。一つは、實際の關羽は決して女色を好まない高士などではなく、むしろ女好きであつたということ。もう一つは、この逸話が關羽と美女に關する物語か生まれる素地となりうるということである。特に、この逸話が曹操らによる呂布討伐時のことである點は興味深い。關羽が求めた秦宜祿なる人物の妻を、呂布の妻・貂蟬と入れ替えれば、關羽と貂蟬の物語か出來上かるてはないか。

このように史書の中に關羽と貂蟬をめぐる物語か生まれる手掛かりを見出すことはできる。それではなぜ關羽は貂蟬を斬ることになつたのか。關羽はなぜ貂蟬を斬らなければならなかつたのか。その原因として二點を挙げることができる。一つは、女性を「禍水」、すなわち人を惑わし物事をぶち壊す禍の元と見る中國の傳統的な思想である。そしてもう一つは、關羽崇拜の影響である。以下に詳しく述べたい。女性を禍の元と見る思想は古くからあつた。中國の歴史を見ても、殷の妲己、周の褒姒、吳の西施、唐の楊貴妃などといった亡國の美女とされる女性かいる。君主か女色に迷つて國政を誤つても、その責任を女性の方に轉嫁していたわけである。また、小説『水滸傳』には女性を徹底的に敵視する傾向が見られるか、これも女性を禍の元とみならず思想の強い表れてある。

「關羽か貂蟬を斬る物語」における貂蟬は、最初から呂布の妻という設定になつており、夫か滅ぼされるや、手のひらを返したように關羽におへつかを使つて保身を圖る。徹底的に、不義不貞にして、美貌て男を惑わす悪女として描かれている。このような悪女か、義を重んじ、女色を好まない關羽によつて成敗されるという物語の根底には、明らかに女性を禍の元とみなす思想かあるといえよう。

先述の如く、『三國志平話』や元雜劇「錦雲堂美女連環記」といった『三國志演義』成立以前の作品でも、貂蟬はもともと呂布の妻という設定になつていた。貂蟬か「連環の計」に協力したのは、單に夫・呂布と再び結ばれたいかためであり、國家や民を憂えてのことではない。おそらくこれが、「關羽か貂蟬を斬る物語」か生まれた當時にあつても普遍的に受け入れられていた貂蟬像たつと思われる。だから、「關羽か貂蟬を斬る物語」に登場する貂蟬像も、女性を禍の元とする

思想と相俟って、違和感なく受け入れられたのだと考えられる。

したかつて、「關羽か貂蟬を斬る物語」は、關羽か正義を守るために悪(惡女)を斬るといふのが主題であり、あくまでも關羽の高潔な人品や英雄ふりか強調されている。「關羽か貂蟬を斬る物語」は關羽を引き立てる物語なのである。

そして、關羽が貂蟬を斬ることになったもう一つの原因として考えられるのか、關羽崇拜の影響である。現在でも關羽は神として崇拜されているか、隋唐の頃に一部地域の信仰として始まった關羽崇拜は、宋代以降、中國各地に広がっていった。北宋以降の各王朝の皇帝たちは關羽に對して次々と爵位を追贈し、また、各地に關帝廟か建立されていった。

こういった關羽崇拜との關係を踏まえ、丘振聲氏は「關羽か貂蟬を斬る物語」について、

(他人の妻を求めるといふ) 關羽のこういふ行爲は、もともと封建統治階級にあつてはごく普通のことであつた。しかし、人々に神の如く崇拜されている關羽にとって、このような色慾沙汰は、とうあつても面目か立たないことであり、雅やかさに傷かつてしまふ。やはり抹消するに限る。「斬貂」(關羽か貂蟬を斬る)のよきな芝居はおおかた關羽の尊嚴を守るために創作されたのであらう。

と述べている。關羽か貂蟬を斬ることになつた理由として、この見方は妥當といえるか、さらに言葉を足す必要がある。一口に神といつても様々であり、必ずしも全ての神か色慾沙汰に無縁とは限らないから

た。た、關羽に限つていへば、義に厚いところや女色を好まないところかその崇拜される要因であらうから、そのような關羽か他人の妻を求めるといふのは、受け入れられ難い話だつたとみられる。

また、先に引いた關羽か他人の妻を求めるといふ件(『三國志』關羽傳の裴松之注に引く「蜀記」の記載)に見える「その妻」(原文「其妻」)とは、秦宜祿の妻であるか、これか呂布の妻と誤讀されることも多かつたやうである。呂布の妻といへば貂蟬といふことで、こうして關羽か他人の妻を求めた話は、關羽か惡女・貂蟬を成敗する物語へと作り變えられたのである。これによつて、關羽が好色だつたといふ汚點を抹消し、關羽の好感度を高めることかできるわけだ。

(二) 『三國志演義』はなぜ「關羽か貂蟬を斬る物語」を採用しなかつたか

冒頭で述べたやうに、『三國志演義』の中に「關羽か貂蟬を斬る物語」はない。『三國志演義』はなぜ「關羽か貂蟬を斬る物語」を採用しなかつたのか。續いてこの問題について検討したい。

第一に考えられる理由は、『三國志演義』の歴史志向の強さである。明の蔣大器は、『三國志通俗演義』序の中で次のやうに述べている。

前代(元代)には野史によつて「評話」(平話)を作り、目の不自由な者に語らせていたか、その中の言葉は卑しく誤りも多くて野卑に失つていたので、士君子は多くこれを嫌つていた。東原の羅貫中は、平陽の陳壽の『三國志』をもとに、諸國史とつき合わけ、後漢靈帝の中平元年から、晉の太康元年までのことを、注

意深く取捨選擇して編み、これを『三國志通俗演義』と名付けた。文はあまり難しくなく、言葉はあまり卑俗でなく、事實を記して、歴史に近い。

また、清代ではあるが、『三國志演義』に改訂を加えた毛宗崗も『三國志演義』の「凡例」で次のように言う。

後の人が捏造したことのうち、俗本の『演義』にはないか、今日の「傳奇」(戯曲)にあるものに、關公(關羽)が貂蟬を斬る、張飛が周瑜を捉えるなどといったものがあるか、これらかいつわりであることは、今の人の知るところである。・今これら全てを削除し、讀者かてために感わされないようにした。

したがって、關羽が貂蟬を斬るなどということが史實でないから、なるべく史實に近づけようとした『三國志演義』では「關羽が貂蟬を斬る物語」を採用されなかった、と考えるのは妥當である。

しかし、そもそも貂蟬は架空の人物である。その架空の人物である貂蟬が『三國志演義』に登場する以上、たまた『三國志演義』の歴史志向の強さのみをもって、この小説が「關羽が貂蟬を斬る物語」を採用しなかった理由とするのは問題であらう。

そこで、もう一つの理由として、「關羽が貂蟬を斬る物語」を採用すると、『三國志演義』における關羽と貂蟬の人物像に矛盾をきたすということが考えられる。『三國志演義』に登場する貂蟬は、もはや不義不貞の悪女ではない。容貌か美しいばかりでなく、勇敢で機知に富み、義を重んじる女性として描かれている。やはり義を重んじる關

羽がそのような貂蟬を斬るわけにはいかない。このように、人物像の矛盾か生しることを避けるため、『三國志演義』では「關羽が貂蟬を斬る物語」を採用しなかったと考えるのが妥當であらう。

(三) 關羽と貂蟬をめぐる物語の變容の背景

先に見た通り、その後、關羽と貂蟬をめぐる物語は變容を見せる。この變容の背景についても考察しておこう。

『三國志演義』の登場によって、新たな四行方正な貂蟬像か普及し、定着していった。もちろん、一般民衆かみな『三國志演義』を讀むことかてきたわけではない。多くは、『三國志演義』をもとに改編・改作された戯曲や語り物などを通して、新たな貂蟬像を受容していったと思われる。

そして、その新たな貂蟬像か定着すればするほど、先ほど述べたような關羽と貂蟬の人物像の矛盾から、「關羽が貂蟬を斬る物語」に対する反發か生まれてくる。前にも引いたように、晴島味水は「俗に演じられている『斬貂蟬』はほとんどてため」と考えており、また、毛宗崗も『三國志演義』第八回の總評の中で、

最も恨むらくは今の人が關公か貂蟬を斬る話を誤って傳えてい
ることである。そもそも貂蟬には斬るべき罪はなく、むしろた
えるべき功績かある。

と述べている。

そこで、關羽と貂蟬をめぐる物語は變容し、『三國志演義』の人物像に則って、矛盾の生じない新しい物語が作られたのである。その結

果、貂蟬が關羽に斬られることのない、「三國志演義」の人物像になした人々にとつて納得のいく物語となつた。また、子弟書「十問十答」のように、貂蟬を下凡した仙女とする設定も出てくるか、これは「三國志演義」によって高められた貂蟬像か、その後獨り歩きして行き着くところまで行つた結果といえよう。

(四) 「關羽が貂蟬を斬る物語」はなぜ残つたか

關羽と貂蟬をめぐる物語が變容し、新しい物語が生まれた一方で、「關羽が貂蟬を斬る物語」が生き残っているのもまた事實である。京劇にこの演目があるし、民間傳説「關羽月下斬貂蟬」も傳わっている。「三國志演義」が切り捨てたにもかかわらず、この物語が残つたのは何故であらうか。

「三國志演義」の登場後、この小説が甚だ大きな影響力を持ったことは周知の通りである。「三國志演義」以後に作られた「三國志」ものの文藝作品は、多くか「三國志演義」にもとづいている。京劇の中にはそういった演目が多々見られるし、本稿で取り上げた彈詞「三國志玉璽傳」も「三國志演義」に負うところか大きい。

しかし、「三國志演義」は知識人の手になる小説である。したがつて、採り入れる物語の選擇は知識人の價值観によってなされている。先述の通り、「關羽が貂蟬を斬る物語」は、人物像に矛盾が生じることを避けるために「三國志演義」に採用されなかつたとみられるわけだか、これはあくまでも知識人側の選擇に過ぎない。

民間の一般大衆の價值観は知識人のそれと一致するとは限らない。先にも觸れた『水滸傳』は、「三國志演義」と比べると多分に粗野であり、その底流にある價值観は知識人のそれではなく、一般民衆のも

のに近い。その『水滸傳』には女性を徹底的に敵視する傾向が見られるわけで、これは「關羽が貂蟬を斬る物語」と相通するものがある。ここから、知識人か「關羽が貂蟬を斬る物語」を嫌つたのに對し、一般民衆の聞てはこういつた物語はむしろ好まれたのではないかと想像される。つまり、「三國志演義」に見られる知識人の價值観とは異なる一般民衆の價值観か、「關羽が貂蟬を斬る物語」を生き残らせ、今日まで傳えさせたのはなからうか。先述の通り、「三國志演義」は確かに大きな影響力を持ち、そこに描かれた人物像も一般民衆の間に普及した。しかし、「三國志演義」が採用しなかつた物語が全て驅逐されたわけではないのである。

「三國志演義」はあくまでも知識人の價值観によって選擇された物語を傳えているに過ぎない。「三國志演義」に採用されずとも生き残つてきた「關羽が貂蟬を斬る物語」によって、我々は綿々と受け繼がれてきた一般民衆の價值観による「三國志」物語を知ることかできるのである。

結び

以上、關羽と貂蟬をめぐる物語を、「關羽が貂蟬を斬る物語」と、その後の變容した物語とに分けてそれぞれ紹介し、これらの物語の背景について論じてきた。最後に、關羽と貂蟬をめぐる物語全體についてまとめておきたい。

「關羽が貂蟬を斬る物語」では、民間の一般大衆の間で形作られた關羽と貂蟬の人物像にもとづく物語展開が見られた。特に、貂蟬は「三國志演義」とは違い、不義不貞の悪女として登場した。しかし、「三國志演義」の成立と普及によって、古い人物像は追いやられ、「三

「國志演義」に見られる人物像が、人々の思い描く關羽像・貂蟬像の主流となり、二人をめぐる物語もそれにもとづいて作り直されていった。その結果、關羽と貂蟬をめぐる物語は、關羽を引き立てる物語から、關羽を引き立てつつも貂蟬をも引き立てる物語へと變容していったといえる。

しかし、その一方で、「關羽が貂蟬を斬る物語」も今日まで生き続けていることは、やはりこの物語が人々をとらえて離さない魅力を持っていることを示している。それは、「三國志演義」に採用されなかった物語を支持する一般民衆の價值観か、「關羽が貂蟬を斬る物語」に流れているからである。中には、民間傳説「關羽月下斬貂蟬」のように、それまでのものより關羽はやや人情深く、また貂蟬も不義不貞でない「關羽が貂蟬を斬る物語」も生まれている。これは「三國志演義」によって定着した新たな人物像の影響だが、たとえ形を變えながらも、「關羽が貂蟬を斬る物語」はこれからも傳えられていくに違いない。

注

- (1) 従来、多くの研究者が『三國志演義』における關羽像についての論考を発表している。ここでは紙幅の関係で主なものを挙げるにとどむ。董每敏『三國演義試論』(上海古典文學出版社、一九五六年、七〇―八一頁)、李希凡『略論「三國演義」里的關羽的形象』(《文藝報》一九五九―一七)、劍鋒『「三國演義」如何塑造關羽的藝術形象』(《海南師專學報》一九八二―)、周兆新『三國演義考評』(北京大學出版社、一九九〇年、一六二―一七六頁)、井波律子『三國志演義』(岩波新書、岩波書店、一九九四年、八五―一三三頁)。
- (2) 横面名については中國で一般的に通用しているものを用いた。卷数は『三國志演義』の現存最古の版本とされる嘉靖元年本に據る。

關羽と貂蟬

- (3) 貂蟬像については次のような論考がある。劍鋒「巾幗不讓須眉——論「三國演義」中的婦女的藝術形象」(《三國演義》研究集、四川省社會科學院出版社、一九八三年)、李春祥「淺論貂蟬」(《三國演義》論文集、中州古籍出版社、一九八五年)、胡邦輝「論貂蟬」(《三國演義》論文集、中州古籍出版社、一九八五年)。

- (4) 呂布^①き後の貂蟬については、羅貫中の原作に最も近いといわれる葉逢春本(嘉靖二十七年(一五四八))はしめ、目を通し得た明代の版本のうち周曰校本・英雄譜本・余象斗本・志傳評林本・鄭少垣本・鄭靈林本・楊國寶本・湯寶尹本・劉龍田本・笈齋齊本は、いずれも嘉靖元年本と同じ(二十卷開本系諸本(朱鼎臣本・黃正甫本など)はこの簡省略)。清代の毛本では、「將呂布妻女戲回許都」とあるのみで、評に「未識貂蟬亦在其中否」とある。尙、『三國志演義』の版本とその系統については、中川論『三國志演義』版本の研究』(汲古書院、一九九八年)を参照。

- (5) 『三國志平話』巻上で貂蟬は自分の身の上について、「陳妻本姓任、小字貂蟬、家長是呂布、自隨兆府相失、至今不曾見面」と述べる(國立公文書館内閣文庫蔵「全相平話」所收「辛治新刊全相平話三國志」に據る)。
- (6) 徐文昭編、嘉靖三十二年(一五五三)、詹氏進賢堂重刊。現在はスペイン・エスコリアル王立圖書館蔵。「風月錦囊」『全家錦囊』『全家錦囊續編』の三部分から成る。詳しくは孫崇濤「風月錦囊考釋」(中華書局、二〇〇〇年)を参照。尙、本稿では「風月錦囊」については『善本戲曲叢刊』第四輯(臺灣學生書局、一九八七年)所收の影印本に據り、孫崇濤・黃仕忠監校「風月錦囊箋校」(中華書局、二〇〇〇年)を参照した。
- (7) 『全家錦囊續編』巻二。内題「精選續編要全家錦三國志大全」。既成の元明雜劇や南戲の三國戲を寄せ集めたもので、曲調は北曲と南曲とが混ざっている。尙、『三國志大全』を中心に明代の三國故事傳播の形態を論じたものに、上田望「明代における三國故事の通俗文藝について」――

- 「風月錦囊」所收「精選續編全集家錦三國志大全」を手掛かりとして——（『東方學』第八十四輯、一九九二年）がある。
- (8) 『風月錦囊』所收「三國志大全」に見られる關羽か貂蟬を斬る場面については、散佚した雜劇「關大王月下斬貂蟬」に負うところか大きかったのではないか、あるいはこの雜劇そのものではないか（但し①②③の部分に限る）といった指摘がある。前掲注（？）上田氏論文、および黃仕忠「三國志」戲文考」（『中山大學學報』〔社會科學版〕、一九九七年）五）参照。
- (9) 「三國志大全」の關羽か貂蟬を斬る場面の内容については、井上泰山「貂蟬像の檢證」（『關西大學東西學術研究所紀要』三三六、二〇〇三年）で詳しく検討されている。
- (10) 胡文煥編。現存二十九卷。本稿では胡文煥編「群音類選」全四冊（中華書局、一九八〇年）を用いた。
- (11) 「關斬貂蟬」十三曲のうち、四曲は文字か「三國志大全」と似通っており、兩者は繼承關係にあると考えられる。
- (12) 現在運行している「綴白裘」十二集（各集四卷）は乾隆四十二年（一七七七）に編纂されたもの。同名の書は明末からずであつたという。本稿では『善本戲曲叢刊』第五輯（臺灣學生書局、一九八七年）所收の影印本を用い、汪協如點校「綴白裘」（中華書局、一九五五年）を参照した。
- (13) 「三國志平話」巻上には虎牢關にて張飛か一人て呂布を破る場面がある。元・鄭光祖「虎牢關三戰呂布」雜劇においても張飛は主役として最も活躍する。
- (14) 「戲考」十七冊（中華圖書局、一九一七年）に收録。
- (16) 清乾隆年間抄本。撰者不詳。全二十卷。鄭州市圖書館藏。本稿では重萬周校點「三國志玉璽傳」（中國古典與講唱文學叢書、中州古籍出版社、一九八六年）を用いた。
- (16) 湖北省群衆藝術館編、江雲・韓毅中主編「三國外傳」（上海文藝出版社、一九八六年）五四頁。尚、譯書に立岡祥介・岡崎由美譯「三國志外傳」（徳間書店、一九九〇年）がある。
- (17) 本節に挙げた「關羽か貂蟬を斬る物語」は戲曲・語り物・民間傳説と異なる様式にわたっており、特に戲曲では劇種も様々である。各様式、各劇種はそれぞれ異なる性格を持っており、本来はそれぞれの性格を踏まえた上で、分析・検討を試みるべきであるが、資料数が少ないため、そのようにすると議論が散漫になってしまう感は否めない。従って、今回は資料の性格についてはひとまず置き、多少の變化はあるものの基本的な筋立てが共通する物語か、異なる文學様式にわたって存在してきたことにのみ注目したい。
- (18) 第二折において、貂蟬は王允に、「您孩兒不是這裏人、是忻州襄木耳村人氏、任昂之女、小字紅昌。因漢靈帝刷宮女、將您孩兒選入宮中、管貂蟬冠來、就喚做貂蟬。靈帝將您孩兒賜丁建陽、當日呂布與丁建陽爲養子、丁建陽將您孩兒匹配與呂布爲妻。因黃巾賊作亂、俺夫妻每失散。您孩兒流落在父親宅中、將您孩兒如親女一般相待」と語る（『古本戲曲叢刊』四集（商務印書館、一九五八年）所收「脈望館鈔校本古今雜劇」に據る）。
- (19) 諸葛君以俗演「新貂蟬」近疑、故以此女修道登仙、而於蔡中郎妻・牛太師女相會、是源終「琵琶」、正所謂弄假成真矣。（『影影佳書、黃裳校錄「蓮山堂明曲品劇品校錄」』（上海出版公司、一九五五年）に據る）。
- (20) 本稿では、劉烈茂・郭精純主編「清軍王府鈔繡曲本・子弟書集」（江蘇古籍出版社、一九九三年）に據った。
- (21) 諸葛君編「三國人物傳説」（『故事會』叢書、上海文藝出版社、一九八六年）三七頁。
- (22) 「貂蟬之死」の臺本は、陸學儀編著「川劇名戲欣賞」（重慶出版社、一九八六年）に收録されている。

(23) 曹公與劉備國呂布於下邳、關羽啓公、布使秦宜慈行求救、乞養其妻、公許之。臨破、又屬啓於公。公疑其有異色、先遣迎看、因自留之、羽心不自安。(陳壽撰、陳乃乾校點「三國志」全五冊(中華書局、一九八二年版)(一九五九年初印))に據る。

(24) 例えば、「詩經」大雅「瞻卬」に、「哲夫成城、哲婦傾城、懿厥哲婦、爲魯夙勳。婦有長舌、維厲之階。亂匪降自天、生自婦人。匪敬匪誨、時維婦寺」とある(阮元校刻「十三經注疏」全二冊(中華書局、一九八〇年)に據る)。また、好色か亡國を招くという戒めも古くから見られ、例えば、「書經」五子之歌に、「内作色荒、外作禽荒、甘酒嗜音、隳宇彫牆。有一于此、未或不亡」とある(同上)。

(25) 「水滸傳」に登場する女性は、梁山泊に入る扈三娘・顧大嫂・孫二娘など一部を除き、閻婆惜・潘金蓮・玉蘭・白秀英などほとんどか悪人として描かれる。

(26) 關羽崇拜についても様々な論考が發表されている。主なものは、井上以智爲「關羽祠廟の由來並に變遷」(『史林』二六―二七、一九四二年)、大矢根文次郎「關羽と關羽信仰」(一)―(四)『東洋文化』第二百一十四・二百二十五・二百二十八・二百二十九號、一九四三・四四年)、井上以智爲「關羽信仰の普及」(一)『福國商大論叢』四、一九五一年)、金文京「三國志演義の世界」(東方選書、東方書店、一九九三年、一九九一五頁)、菅東洲・文廷海「關羽崇拜研究」(巴蜀書社、二〇〇一年)、二階堂善弘「中國の神さま 神仙入集者列傳」(平凡社新書、平凡社、二〇〇二年、二二―四〇頁)、額清洋「關公全傳」(臺灣學生會局、二〇〇二年)。

(27) 關羽に對する爵位追贈の狀況を一部示しておく。

北宋崇寧元年(一一〇二) 忠愍公
大觀二年(一一〇八) 武安王
南宋淳熙十四年(一一八七) 義勇武安英濟王

關羽と貂蟬

元天曆元年(一三一八) 顯靈義勇武安英濟王

明萬曆四十二年(一六一四) 三界伏魔大帝神威遠震天尊關聖帝君
清代になっても加封は續き、最終的に關羽の封號は「忠義神武靈佑仁勇威顯護國保民精誠悃懇昭耀宣德關聖大帝」と長いものになった。

(28) 丘振聲「三國演義續撰」(漓江出版社、一九八三年)一一〇頁。原文「關羽這種行爲、本來在封建統治階級中是可寬宥的。不過、被人奉若神明的關羽、有這樣的一件風流韻事、總是不體面的、有傷風雅。還是抹掉爲好。《新刻》這樣的戲大概就是出於維護關羽的尊嚴而創作出來的。」

(29) 例えば、八仙の一人、呂洞賓は好色家で、「色仙」とも稱される。

(30) 明・鄭以偉の「舟中讀華陽國志」時には、「百萬軍中刺將時、不如一劍新妖姬。何緣更戀伴來嬌、陳壽常璩志雜私」(陳濟生編「天啓崇禎兩朝遺詩」中華書局、一九五八年)とあり、史書の記載が不當であるとして、關羽か他人の妻を求めたことを史實として認めたくない心境を表している。

(31) 丘振聲氏は、關羽か秦宜慈の妻を娶ろうとしたことを直接題材にするのは不都合なので、意圖的に「秦宜慈の妻」を「貂蟬」に換えた、とする(注(28)所掲書二二〇頁)。しかし、後の筆記小説(例えば明・胡應麟「少室山房叢書」卷四十一「莊嚴委談」下)などに、「三國志」關羽傳後注引「蜀記」の記事を關羽が呂布の妻を所望したと誤って解釋している例が見られるところから、これは意圖的に換えられたのではなく、誤謬にもとづくと考えた方が妥當と思われる。

(32) 前代書以野史作爲評話、令醫者演說、其閉言辭鄙謬又失之於野、士君子多厭之。若東原羅貫中、以平陽陳壽傳、考諸國史、自漢魏晉中平元年、終于晉太康元年之事、留心積益、目之曰「三國志通俗演義」。文不甚深、言不甚俗、事紀其實、亦庶幾乎史。(羅貫中「三國志通俗演義」(人民文學出版社、一九七四年)に據る。)

- (33) 後人捏造之事、有俗本演義所無、而今日傳奇所有者、如關公斬貂蟬、張飛捉周瑜之類、此其誣也、則今人之所知也。今皆削去、使讀者不爲齊東所誤。(羅貫中著、毛繪・毛宗崗評、劉世德・鄭銘點校『三國志演義』全三冊〔中華版古典小說寶庫、中華書局、一九九五年〕に據る。)
- (34) 最恨今人訛傳關公斬貂蟬之事。夫貂蟬無可斬之罪、而有可嘉之績。(庄(33)所掲書に據る。)
- (35) 沈伯俊・譚良嘯編著『三國演義辭典』増訂本(巴蜀書社、一九九三年)「改編與再創作」部分參照。

【附記】本稿は二〇〇三年十月の日本中國學會第五十五回大會での口頭發表をまとめ、加筆修正したものである。發表および本稿執筆の際には諸先生方から有益な御教示をいただいた。茲に御禮申し上げる。ただ、せっかく御教示をいただいたきながら、未消化の部分も多々ある。今後の課題とさせていただきます。